
無意識

利木 糸会

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無意識

【Nコード】

N8223I

【作者名】

利木 糸会

【あらすじ】

自他共に認める「良い子ちゃん」の私。

良い子にしているのって、楽なんだけど、無意識のうちに色々すり減ってるんだ。

それに気付いた時は、もう手遅れだったりするかもしれない。

もっと早く気付いていれば、良い子になんかしてなければ、良かった……？

実話かもしれないし、作り話かもしれない「私」のお話。

一話完結のような形を取っています。

本作品には一部、殺傷行為・自傷行為の描写が含まれます。

01「家族」

自分で言うのも何だけど、私は優等生だった。
いや、現在進行形で優等生なんだけれども。

優等生っていうか、「良い子ちゃん」、なのかな。

親の扱いやすい子供。先生の扱いやすい生徒。先輩の扱いやすい後輩。

笑顔で言われたことやつてりや良いんだもん。楽だよ。それだけで評価してもらえる。

おかげで、人生順風満帆。障害なんか何もない。波風なんか一つも立たない。

素敵でしょ、このクソつまんねえ人生。

ずっと周りの言うこと聴いてきた。

やりたいことがあっても、「ダメ」って言われれば我慢してきた。
まあ、反抗してまで欲しい物も、やりたいこともなかったんだけどさ。

うちは裕福じゃない。子供だったけど、わがまま言っちゃいけないってわかるぐらい。

馬鹿兄貴は、わがまま満載で甘やかされてたけど。

アレが欲しい、コレが欲しい。アレやりたい、コレやりたい。

お前がそんなんだから、全部私が我慢しなくちゃいけないんだ。
私が、帳尻合わせないと。

何てことしてくれてんだ、馬鹿兄貴。

親に何かをねだった記憶なんて、ほとんどない。買ってあげるっ

て言われても、自分で買うからって首振った。
私の物買ってる余裕なんて、ないじゃない。馬鹿兄貴が高いもん
ばっか欲しがるから。

家の為を思っただ断ったのに、「可愛くない」って怒られたりした。
子供がそんな気い使っくなよって言う人もいる。
親もそう思ってたかもしれない。

じゃあ言わせてもらっけどよ。
子供に気い使わせるような家庭環境作んなよ。

小学校の時だったっけ。性格診断検査みたいなのがあった。
質問の一つにこうあった。

家族には何の期待もしていない。

迷わず丸つけた。

だって、あの人たち、自分のことだけで精一杯なんだもの。

別に、寝る家と、食べる物があれば、家族が誰だってどうでもい
いじゃん。

そう思っただ丸つけた。

そしたら、先生が親に電話を掛けてきた。

「検査のこういう項目に丸が付いていたのですが、。。。ちゃんはい
家庭で何かあったんですか」

余計なことしやがって。

私はまた怒られた。

ちよつとずつ、ちよつとずつ、嫌なことが積み重なって、私は家
族が嫌いになっただった。

02「鏡」

お風呂を出て、すぐ横にある鏡。

私は、それが大嫌い。

というか、それに映る自分が大嫌い。

自分の容姿が気に喰わないとかじゃなくて——いや、少しはあるけど——、そこに映っているのが自分だと認識できないから。

これって、異常なことなんだろうか。

そんなこともわからないくらい、私にとっては当たり前前の感覚だった。

どうにも鏡に映っているのが、自分だと思えなかった。

確かに、そいつは私の指示通りに、身体も表情も動かすことができる。

それが気持ち悪かった。自分の身体ではないのに、自分の意思通りに動いてくれる。いっそのこと、全く動かないでいてくれたら良いのに。

そう、たとえば言うならば、他人に取り憑いた気分。魂と身体が、別々になってしまったような感覚。

時には、自分に意思があることすら気味が悪く思えた。私の知らない間に、脳が勝手なことを考え出すから。

人と話していても、今発言しているのが自分なのだと気付くのに、時間が掛かったりすることがある。勝手に口が喋ってしまうのだ。

ハッとした瞬間に、言い知れぬ恐怖に襲われる。

身体が心を裏切り、心が意思を裏切る。脳が心を裏切り、口が意思を裏切る。

そんな醜い営みの全てを、鏡は映しているような気がした。

どれが、本当の私なんだろう。

どこに、本当の私がいるんだろう。

——考えても、仕方ないよね。

だって、この脳も意思も心も、私のモノじゃないかもしれないんだもの。

それぞれの持ち主さんへ。

勝手に借りてきてしまつて、ごめんなさい。

大事に使うようにしますから、いつか必ず、あなたの欠けてしまったパーツを取りに来て下さいね。

どっかの誰かの心や身体。

借り物ばっかで、継ぎ接ぎ人形みたいな私。

あんまり見ると、縫い目がほどこっちゃうかも。

さあて、そうならない内にさっさと寝ようかな。

今日も、鏡を壊したい衝動に勝てたぞ。

叩き割つて、大事な他人様の身体、傷つけたら申し訳ないもん、ね。

03「異常」

——調べに対し、少年は「誰でも良いから人を殺してみたかった」と話しています。

「……とんでもないわねえ」

単調にニュース原稿を読むアナウンサーに、母はそう答えた。テレビに話しかけるなんて、オバチャンの証だわ。

「異常よね、異常。人の命を何だと思ってるんだか」
まだ何か言ってるし。

私はその背中をじっと見つめる。

包丁を握りしめた手に、無意識に力が籠った。

そして、切っ先を彼女に向けた。

死刑宣告。

あなたは今、容疑者の少年を異常だと言いましたね。
残念なお知らせです。

あなたが、恐らく血を吐くような思いをして産んだ娘は、この少年と同じです。

気を付けて下さい。

あなたの背後に立つ私は、あなたの言葉を借りれば、興味本位で人を殺す「異常」な人間です。

別に、殺さなくても良いんだけどね。

ただちよっと、刺してみたいなあと思うわけですよ。
多分、殺そうと思って殺すと、つまらないと思うんだ。

だって、生き物って簡単に死んじゃうものでしょ。「なあんだ、

こんなもんか」ってなっちゃうと思うんですよ。
だから、刺すだけ。

どんな感触がするのかな、とか、どういう風に血が出るのかな、とか。ちよつと試してみたくなくなるじゃない？ ホント興味本位。

包丁を水平に動かしてみる。

あと5メートル前に出たら、彼女の首からドバーツ！って。血が噴き出しちゃうんだろなあ。白い壁が真っ赤だろなあ。きやあ大変。

……ハイハイ、馬鹿な妄想はここまでにしよ。

私はくるっと回って作業に戻った。

母の代わりに切り刻まれたタマネギを、バターと合わせて火あぶりの刑。

「あー、良いにおい」

ふらふら寄ってきた母に、にっこり笑ってみせる。
条件反射で出てくる、お得意の愛想笑い。

どうせ私には、人殺しなんてできない。
だって「良い子ちゃん」だもん。

それに、殺しても良いと思えるようなクズのせいで刑務所ぶち込まれるなんて、それこそ馬鹿らしいじゃない？
優等生は、そんなコトしないものなのだ。

まあ、理性が切れたら何でも出来ちゃうのが、優等生でもあるんだけどね。

「あんな真面目な子が……」って、よく聞くでしょ？

あなたの周りに真面目な良い子ちゃん、いませんか？
気をつけて下さいね。

あんまり刺激しちゃうと、核爆発、ですよ？

04「笑顔」

気付けばそれは、勝手に身についていた。
知らず知らずの内に、だけど、確実に。

「こんにちは！」

明るいい声と、スマイルのセット。当然、無料ですよ。

某バーガー店が始める前から、私はそれを売っていたと思う。
いつからなんて、覚えてない。

理由は多分、親に言われたから。「人と話す時は、笑顔で」って。
私は、十分すぎる程に教えを守った。

そう、十分すぎる程に。

その結果、条件反射で笑えるようになった。
人を目の前にすると、顔が勝手に笑う。

それに合わせて、心まで笑えるようになっていた。
たとえば嫌いな相手でも、応対している間だけは好きになれる。

一種の自己防衛手段なんだろう。苦痛が最小限ですむ為の。
まあ、嫌な顔が出るよりは遥にマシだし、特に気にせずにおいた。

「こんにちは！」

学校帰りに、ご近所さんにご挨拶。

おばさんは、私と同じように、にこっと笑った。

「はい、こんにちは。。。ちゃん、いつも笑顔で良いわねえ」

「ご近所でも評判の良い子ちゃん。
売り上げは、上々。」

「いらっしやいませ、こんにちは！」

バイト中、お客様にご挨拶。

常連のおじさんが、嬉しそうに笑う。

「やっぱ、。。。さんは明るくて良いね。今度新しく入った子、暗くてダメだよなあ」

お店の看板娘。

売り上げは、もちろん上々。

でも、いつからだっけ。

笑うのが、辛くなってきた。愛想笑いとかって、案外体力も気力も使うんだよね。

最近ろくに寝る時間ないし、キビシイなあ。

もう何か月、休みナシなんだろ。前のお休みが、いつだったかも忘れちゃった。

それから一ヶ月くらい経っても、生活は相変わらず。
いや、ひどくなったかな。

他のバイトがどんどん辞めて、私とパートリーダーの二人でシフトを回す状況が続いていた。

私の方が若いし、リーダーの負担を少しでも減らさなきゃ。あま
り、身体の調子も良くないみたいだし。

頑張らないと。

週四で、月一四〇時間労働。休みは週ゼロ、運が良ければ、二・

三ヶ月に一回。

学校の課題だって、やること山積みなのに全然進まない。やる時間がない。

私だけが、一人遅れていった。

サボってるみたいな目で見られてたら、どうしよう。

頑張らないと。

図書館は、閉館時間まで資料探しに走り回る。夜の書庫って、何か出そうですごい怖いんだけど、そんなこと言ってられない。

「。。。ちゃん、ごめんなさい。この日、代わりに店出てもらえないかな？ 用事があるのよ」

苦しい。

倒れそう。

休みがほしい。

「はい、いいですよ！」

そう答えた瞬間も、私は笑っていたのだろう。

もう、自分が笑っているのか、そうでないのかの区別も付かなくなっていた。

無意識の笑顔は、確実に私の心身を蝕んでいった。

ああ――。

もっと。

もっと。

頑張らないと――。

05「卵」

慣れって、すごいんだなと思った。

あんなに辛いと感じていた生活が、別に苦ではなくなっていた。
慣れっていうか、麻痺？

どっちでもいいか、耐えられるなら。

そんな調子で、多忙生活もだいぶ板についてきた。

それは、喜ばしいこと。

結構不安もあったんだけど、何とかなって良かった。

頑張ったぞ、私。

「ねえ、ここ間違ってない？」

「え、あ、すみません！」

「いいのよ、無理してもらってるものね。お休みあげられなくて、
ごめんね」

大丈夫と思った矢先、普段ならしないミスを犯した。

重大なものじゃないけど、ミスはミス。

気を引き締めていかないと——頑張ろう。

ミスのないように。

頑張ろう。

そう思う程、失敗が重なった。

普段できることが、できない。

今までできていたことが、できない。

身体が、思うように動かない。

——何だ、コレ？

本格的に、休息取らないとまずいかな。
今日は少し早く寝て、身体を休めよう。

——ぐしゃっ！

嫌な音。

頼まれていた卵は、私の手をすり抜けて落下した。
咄嗟に袋を掴むことすらできなかった。
無残な姿をさらす卵を、しばらくじっと見つめる。

別に何を思っていたわけでもない。
ただ、見てただけ。

真冬の風に全身を切り刻まれながら、私はそこを動かなかった。

06「手首」

冷え切った体を引きずって、何とか家に辿り着く。

嫌いな家族に、得意の愛想笑いで詫びを入れて、卵を渡した。

「珍しいわね、あんたが卵割るなんて」

母はきよんとして、そう言った。

「寒いから、手がかじかんで滑ったんだよ」

適当な言い訳でごまかす。

彼女はそれを疑いもせず、興味なさげに「ふーん」とだけ寄越した。

何の期待も、していない。

この人が、私の心情を分かってくれる日なんて、未来永劫有り得ないんだから。

大嫌いな鏡の横を通り、風呂へ入る。

身体は温まってくのに、心は冷え切ったままで、凍っていた。

大丈夫。

少し休めば、ちゃんと今まで通りに動けるようになるから。

今まで通り。

優等生面して。

良い子ちゃんぶって。

愛想笑い振りまいて。

人の分まで働いて。

自分の時間削って。

それで良いじゃない。

素敵な、クソつまらねえ、私の人生。
最高だわ。

——自分がその時、何を思っていたかは知らない。

やっぱり、私は異常なのかも。
こんな時ぐらいは、意識を持つとつよ。

自分が、死ぬ時ぐらいは、さ。

気付いた時には、手首から紅い血が流れ落ちていた。

静かに、ゆつくりと、湯船に溶けていく。

右手には、鈍く光る剃刀。

風呂で、手首切つて、失血死。

あーあ。

なあんだ、こんなもんか。

死に方まで、クソつまんねえな。

まあ、でも、私らしいよね。

優等生は、常にセオリー通りに行動するモノだもの。

湯船が真っ赤に染まる頃。

私は、本当に、無意識になった。

06「手首」(後書き)

「無意識」完結です。

お付き合いいただいた皆様、ありがとうございました(*^^^)

「死」は、私の中にずっと横たわっているテーマです。

次回は、また違った形で描いていきたいと思っていますので、
こちらもよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8223i/>

無意識

2010年10月11日21時21分発行